

澤 幸祐 (2012). 連合学習理論は擬鼠主義の産物か  
－表現論としての連合理論－, 動物心理学研究, 62, 59-67.

澤 幸祐

動物心理学の歴史において、動物のこころを理解する際に「人間に擬して理解する」といういわゆる擬人主義は、賢馬ハンスの教訓やモーガンの公準といった警句によって強く戒められ、多くの研究者たちは「いかにしてより低次の過程によって動物行動を説明するか」に腐心してきた。こうした歴史は、動物行動理解に多くの知見をもたらした一方で、様々な制約によって動物研究を縛ってきたことも事実である。こうした歴史の中で、連合学習研究は、擬人主義的な高次過程による仮説に対抗する、ある種の「帰無仮説」として利用されてきた。連合学習研究が、ラットを用いた研究にその多くを依存してきた歴史を踏まえ、擬人主義ならぬ擬鼠主義といった立場であると揶揄されることもこれまでにはあったわけである。それを受けて、「連合学習では説明できないような実験事態、あるいは実験結果」を報告することに比較認知科学者は腐心してきたように筆者には見受けられる。

本論考では、こうした情勢を受けて日本動物心理学会第71回大会（Animal 2011）において開催されたシンポジウム「動物研究最前線：擬人主義とどうつきあうか」で講演を行った内容についてまとめ、連合学習理論とは擬鼠主義であるのか、連合学習理論とは高次認知過程に対する帰無仮説であるのか、連合学習理論の効用とはどういったものかについて概観した。

動物心理学における連合学習とは、イギリス経験論哲学者によってその骨子が形成されたのちに、パブロフやソーンダイクといった人々によって実験的な手続きが確立されたものであり、時間的あるいは空間的に接近した事象間に連合が形成されることで生活体の行動が変容していくありようを指す。連合形成過程そのものは極めて機械的かつボトムアップなものであると伝統的にみなされており、こうした単純さは先に述べた擬人主義を避けるためのツールとして広く受け入れられてきた。本論考でも取り上げた二次条件づけの連合構造をめぐる議論は、まさにこうした流れを受け継ぐものであり、推論を行っているかのように解釈できるものが単純な連合形成によって説明されるという立場は一定の支持を集めてきた。こうした連合学習理論による現象の説明は、先に述べたように擬鼠主義として揶揄もされてきたわけであり、「よい説明」として万人が受け入れてきたわけではない。本論考では、連合学習とは擬人主義に対抗するようなよい説明なのかについても議論を行った。その中で、連合学習理論は単純さ、機械論的側面、神経科学との連携など多くの利点を備えてはいるものの、それらはいくまでも連合理論の特徴と言える程度のものであって「よい説明」と言えるような強いものではないことを述べた。連合学習理論は、よい説明だから受け入れられてきたのではないのである。

では連合学習理論の効用とはなんだろうか。本論考では、「連合学習理論とは日常的な意味では言語化困難な情報処理過程と言語化される研究者側の解釈を橋渡しする中間言語である」という主旨で、神経科学的研究との連携や複数種間比較上の問題などを論じた。連合学習理論は、帰無仮説として採択されたり棄却されたりするものではなく、生活体の挙動を理解するうえで用いられる表現に過ぎず、それそのものは正しいわけでも間違っているわけでもない。こうした捉え方は、連合学習理論の適用範囲を広げるとともに、既存の連合学習理論そのものの拡張を迫るものと考えており、本プロジェクトにおいて掲げているベイジアンネットワークなどとの連携など、単なる帰無仮説としての連合学習理論からの脱却を訴えるものであるといえよう。